(2) 平成30年のトピックス

ア 平成30年 百日咳のまとめ

本疾患は，感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行規則の一部を改正する省令により，平成30年1月1日から五類感染症（全数把握疾患）となり，京都市における年間報告数は87例，全国の年間報告数は12,104例であった。

性別内訳は，男性39例，女性48例，年齢階級別では，0～9歳が45例，10～19歳が20例，20～29歳が3例，30～39歳が5例，40～49歳が6例，50～59歳が2例，60～69歳が2例，70歳以上が4例であった。

感染経路別をみると，家族内感染が56例，不明が31例であった。家族内感染の内訳をみると，母親が5例，父親が3例，祖父母や息子等が24例，不明が24例であった。

図1 京都市及び全国の報告数の推移

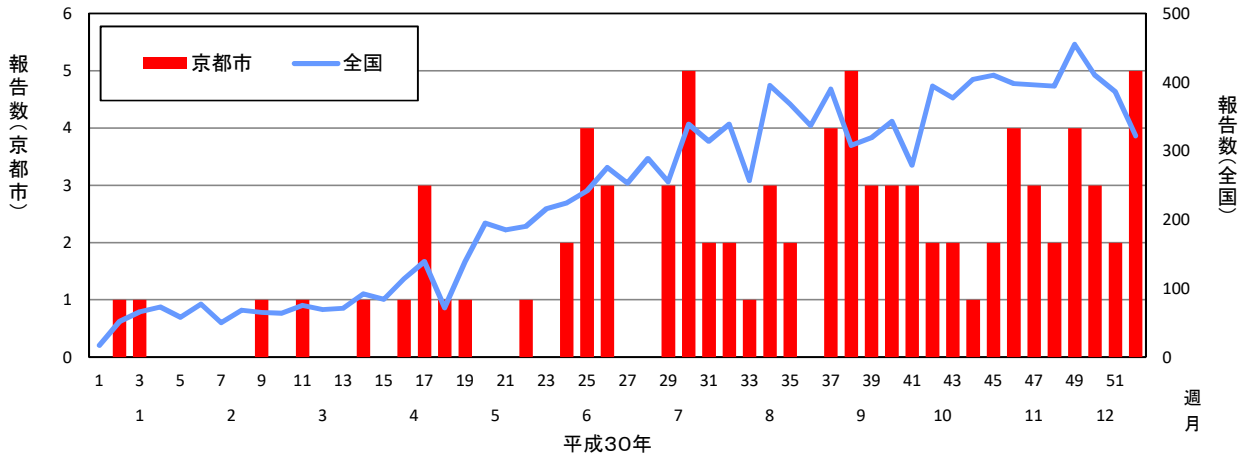


図2 京都市の性別及び年齢階級別の報告数（平成30年）

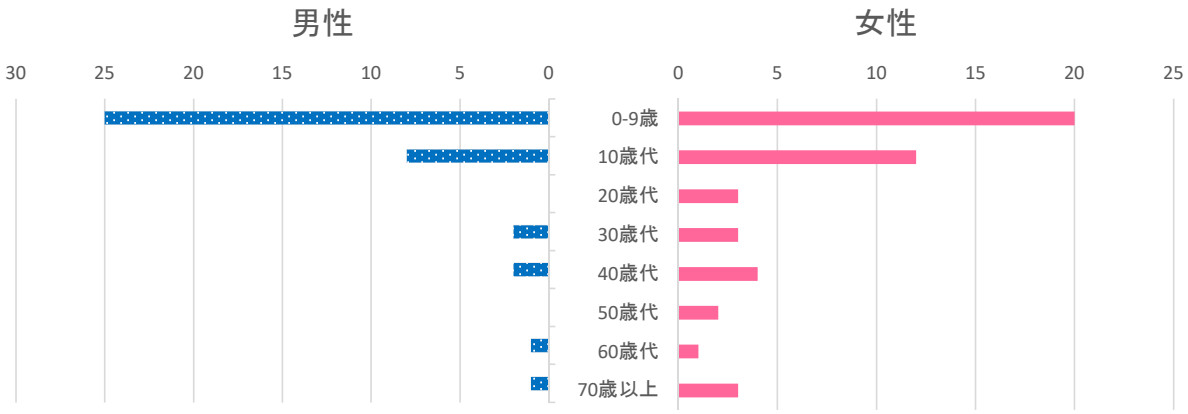
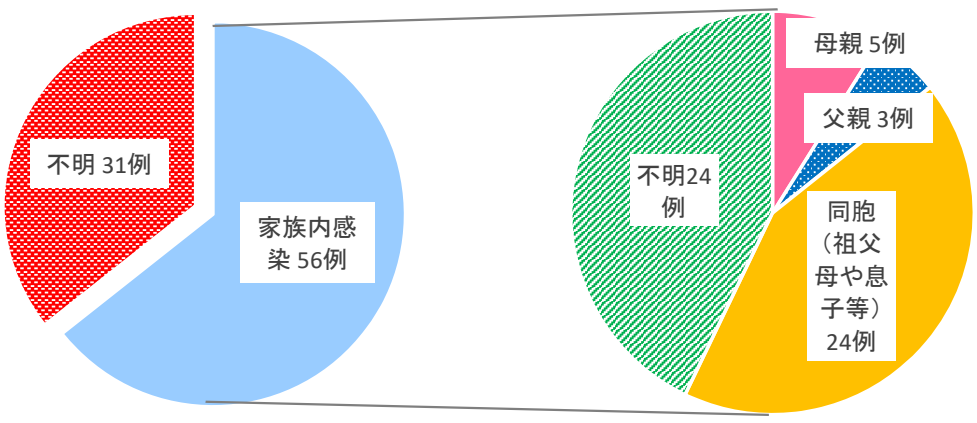


図3 京都市の感染経路別報告数及びその内訳別報告数



イ　平成30年　風しんのまとめ

京都市における年間報告数は14例で，平成24～25年の流行を経て，平成26年から年間報告数が0～1例であったのが，増加に転じた。全国でも，第29週から増加し，年間報告数は2,937例となった。

性別内訳は，男性11例，女性3例で，男性の報告例が顕著に多く，全国でも同様の傾向であった。

年齢階級別では，10～19歳が1例，20～29歳が3例，30～39歳が3例，40～49歳が3例，50～59歳が4例であった。

図1　京都市及び全国の報告数の推移

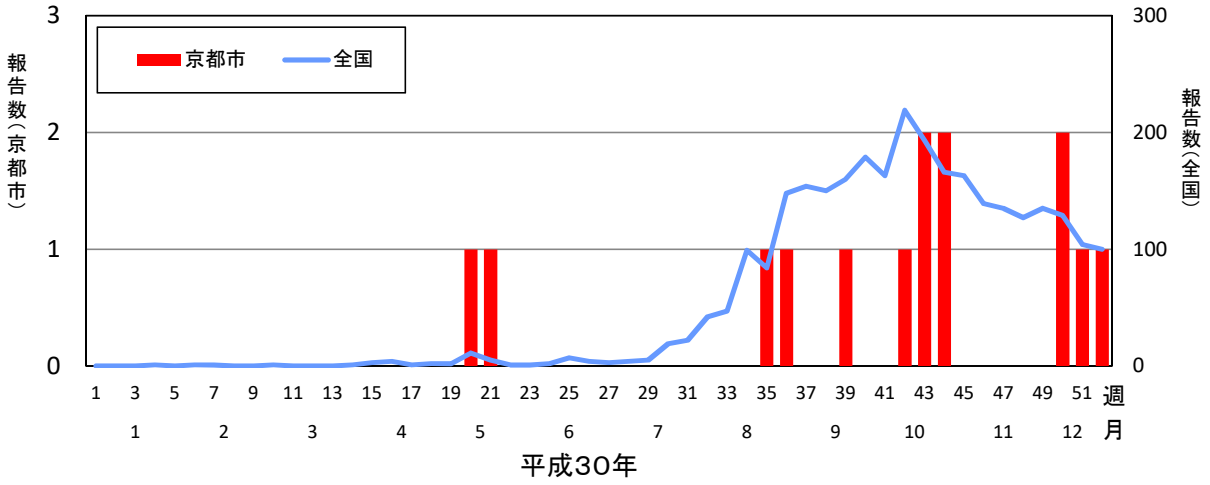
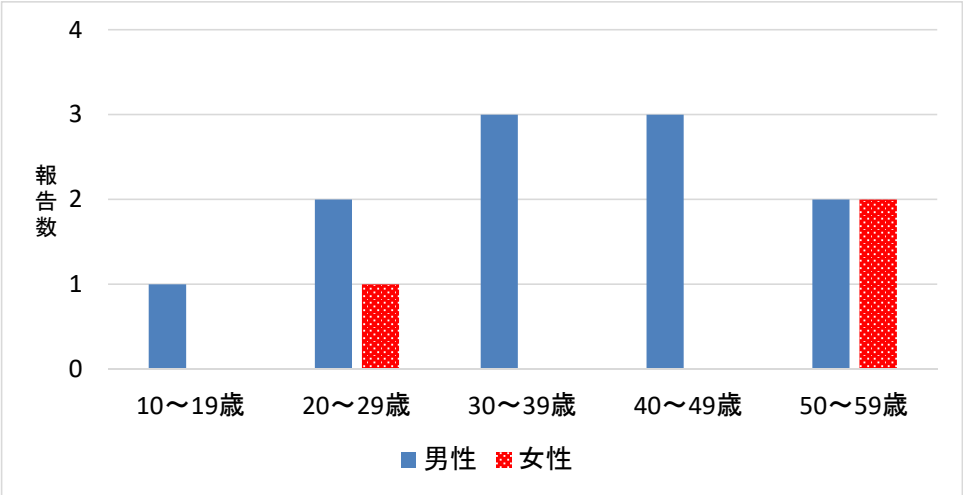


表1　京都市及び全国の年次報告数

		平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
京都市	男性	139	0	1	0	0	11
	女性	71	1	0	0	0	3
	合計	210	1	1	0	0	14
全国	男性	10,984	319	163	126	91	2,379
	女性	3,373	197	106	74	60	558
	合計	14,357	122	57	52	31	2,937

図2　京都市の性別及び年齢階級別の報告数（平成30年）



ウ　平成30年　インフルエンザのまとめ

平成29年/30年シーズンは，平成29年第48週（11月27日～12月3日，1.06）に定点当たり報告数が「1.0」を超えて流行期に入り，第5週（1月29日～2月4日，47.64）にピークを迎えた。その後，第11週（3月12日～18日，6.80）に定点当たり報告数が注意報レベル「10」を下回り，第14週（4月2日～8日，0.96）に「1.0」を下回った。

平成29年/30年シーズンの全国におけるインフルエンザウイルス分離・検出状況は，B型（45.0%），AH3（32.3%），AH1pdm09型（22.7%）の順であった。流行開始時からAH1pdm09型が主に分離・検出されて大半を占める一方，ピーク時から終息にかけてはB型及びAH3の割合が増加した。

平成29年/30年シーズンの京都市の年齢階級別構成は，5～9歳（30.0%）が最も多く，次いで0～4歳（19.1%），10～14歳（15.3%）の順であった。

また，平成30年/31年シーズンの流行は，平成30年第51週（平成30年12月17日～12月23日，3.58）に定点当たり報告数が「1.0」を超え，例年に比べて遅い流行期入りとなった。第2週（1月7日～13日，31.67）に警報発令の指標「30」を上回ったため，1月16日に京都市保健所がインフルエンザ警報を発令した。その後，第4週（1月21日～1月27日，47.71）にピークを形成，第7週（2月11日～17日，9.45）に「10」を下回った。なお，全国のインフルエンザウイルス分離・検出状況は，令和元年5月28日現在，AH3型（57.4%），AH1pdm09（39.0%），B型（3.6%）の順になっている。

図1　京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

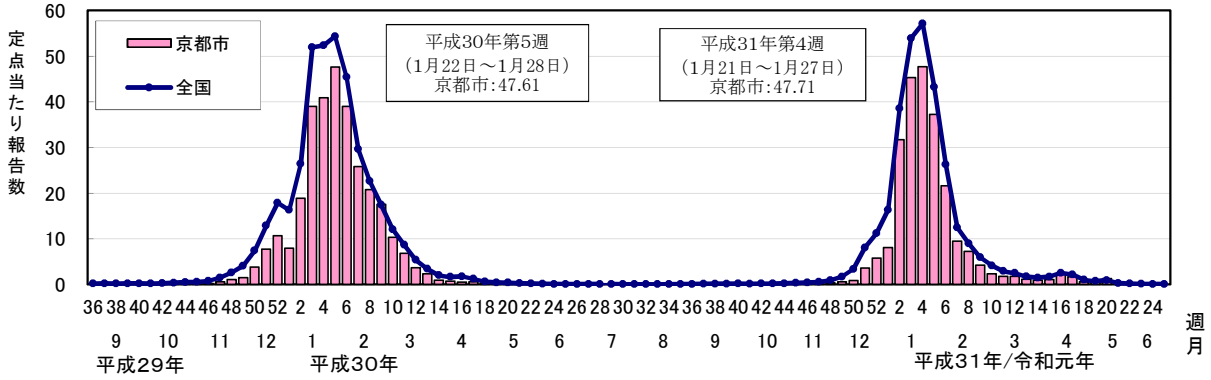


図2　全国のインフルエンザウイルス分離・検出数の推移

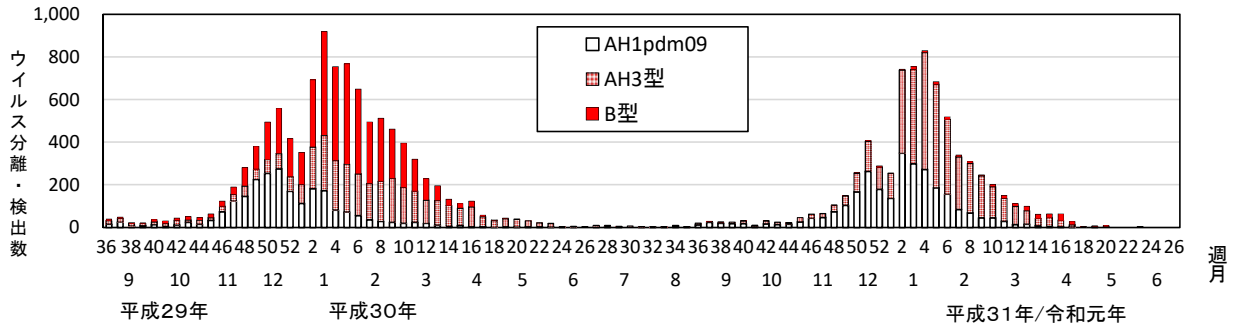


図3　京都市及び全国の年齢階級別割合

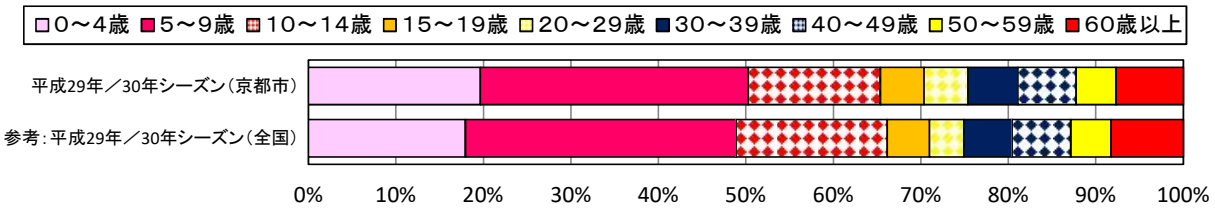


表1　京都市の過去5シーズンの流行状況

シーズン	H25/H26	H26/H27	H27/H28	H28/H29	H29/H30	**H30/H31**
「1.0」を上回った週	第52週	第49週	第2週	第48週	第48週	**第51週**
ピーク時の定点当たり報告数（ピークの週）	37.19（第5週）	28.63（第52週）	32.82（第7週）	29.59（第4週）	47.64（第5週）	**47.71（第4週）**
「10」を下回った週	第13週	第7週	第12週	第10週	第11週	**第7週**

エ　平成30年　伝染性紅斑のまとめ

京都市における平成30年の定点当たり報告数は，第46週（11月12日～18日，0.19）から過去5年平均値を上回って推移し，第52週（12月24日～30日，0.63）に最も高い値を示した。京都市の過去10年間の定点当たり報告数の推移をみると，平成23年，27年にピークがあり，約4年周期で流行している。

年齢階級別では，年により差はあるものの，6歳以下が約7割を占めており，平成30年では4歳（21.0%）が最も多く，次いで5歳（15.9%），6歳（9.7%）の順であった。

図1　京都市及び全国の定点当たり報告数の推移

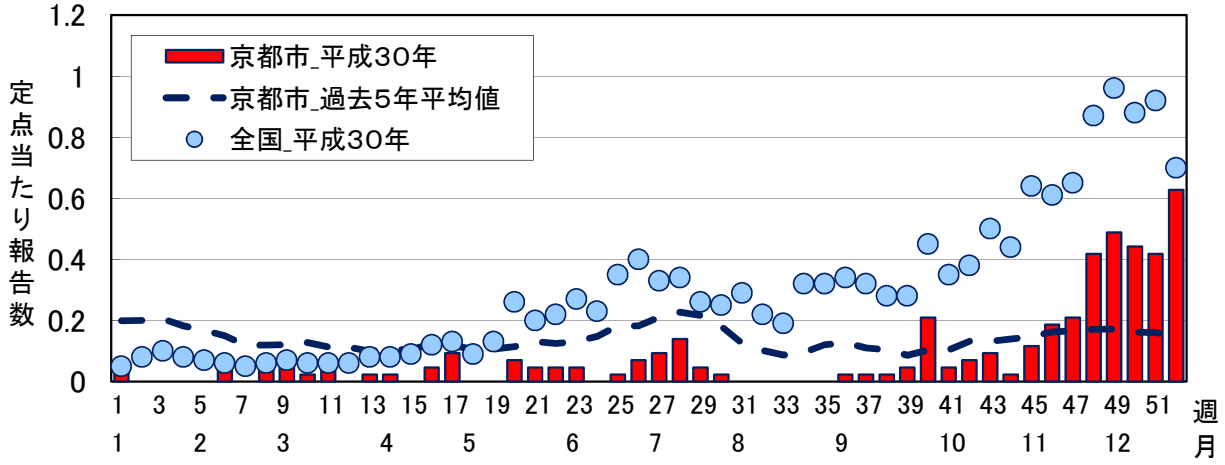


図2　京都市の過去10年間の定点当たり報告数の推移

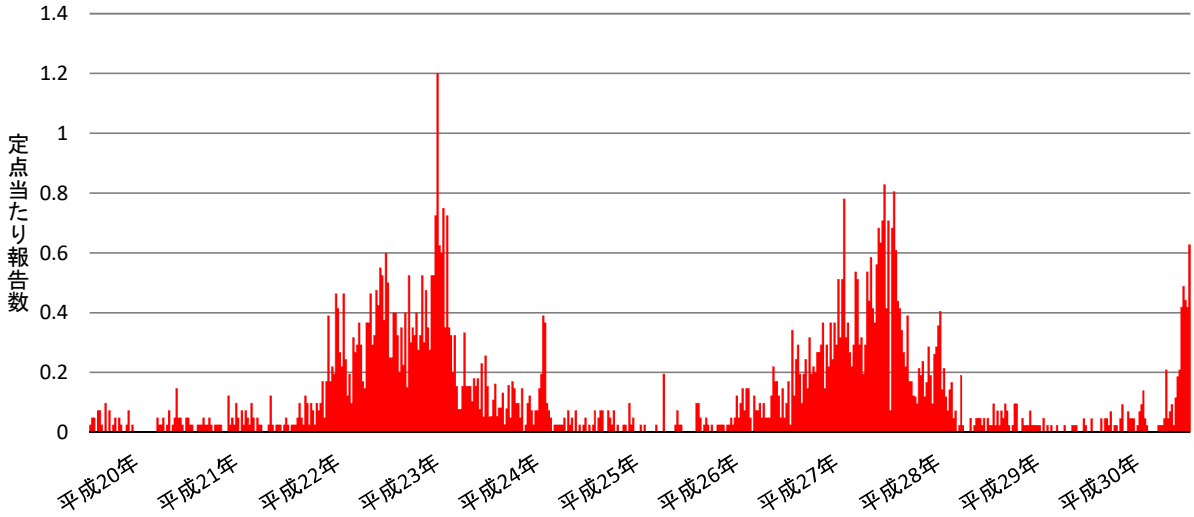
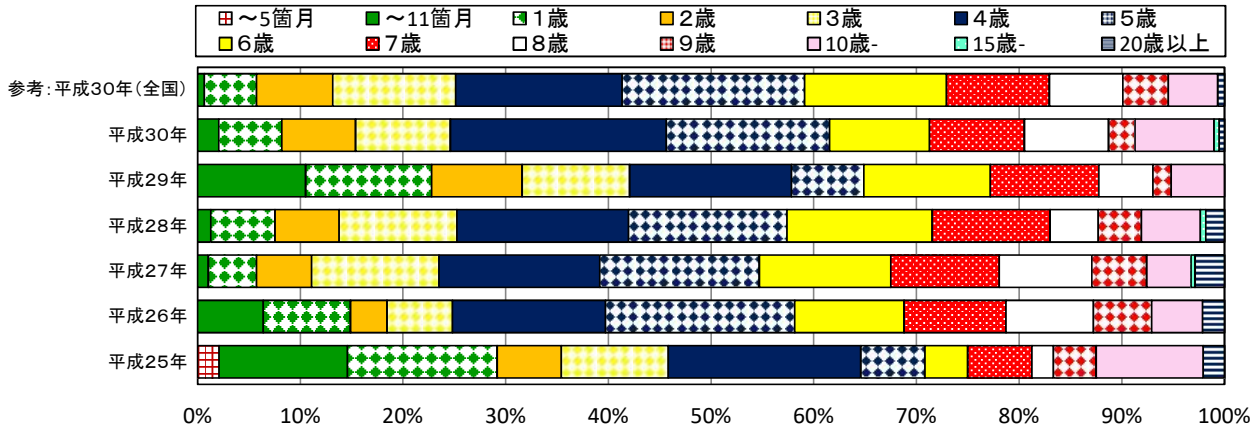



図3　京都市の年齢階級別割合の年次推移